

ムクロジとの出会い

前田志津子

子板づくりに取り組んだ実践です。

遊び

子どもたちが小さな気づきに「ハッ!」としたり「おやっ?」と思ったり「不思議だな」と考えたり「なぜだろう」と疑問を感じるようなことを、幼児期にもっと体験できたらと願っています。

保育の現場からの報告は、正月明けの「羽根つき」の遊びから『羽根つきの羽根の黒い球はムクロジの種である』ことに気づき、そのことから羽

三学期の始業式の日、遊びの紹介場面で私は「今から羽根つきを二〇〇回するからね」と言って、つき始めました(二〇〇という数字は、子どもたちにとってはすごく偉大な数のようです)。子どもたちの教える声を聞きながら、調子にのっ

て一〇〇回続けてついでみせました。

発見

先生が羽根つきを一〇〇回したことが強く心に残った四歳児のエミが、家族に羽根つきの話を伝え、その家にたまたまあったムクロジの実を、エミのお父さんから幼稚園にいただきました。次のようなメモと一緒に。

ムクロジ(無患子)

ムクロジ科の落葉高木。葉は羽状複葉で互生。初夏に淡緑色の単性の小花を開く。果実は球形で、中の黒い種子は羽根つきの羽根の玉を作る。また、果皮は石けんの代用とする。

そのことがなければ、羽根つきの羽根の球が何

なのか、何からつくられているのか、私自身考えることはなかったでしょう。

そこで、子どもたちが日頃使っている羽根の黒い部分をしっかりとみせることにしました。すると子どもたちのなかから気づきや発見の言葉がでてきました。

「硬い」「鉄でできているのかな」「木でできている」

「だれかがペンで黒く塗ったのかな」「いいや黒く色をつけたのではなく初めから黒いみたい」

「形はまるいけれども少しちがう」「ボールのようにまんまるではない」「ここはちょっとつぶれている感じがする」

「機械でつくったのではないようだ」

「やっぱり機械でつくったのではない」「どんぐりみたいな気がするけど」

今度は、ムクロジの種を子どもたちの手のひら

にのせました。子どもたちは顔に近づけよくみながら次のことに気づきました。

「よく似ている」「羽根の黒いところとおんなじやん」

さらに子どもたちの要求があつたのでムクロジの種を羽子板でつきました。子どもたちは目で羽根の動きを追いながら、耳を傾けて聞いていました。

「音が同じ」「球が同じ」と確信しました。

この黒い球は羽根についている球と同じであること、そしてこの黒い球とはムクロジの種であるということを知りました。

『羽根つきの羽根の球はムクロジの種であつた』ことを知った喜びは大きなものであります。

この取り組みは、教師が子どもたちに羽根つきをしてみせたことから、そのことを家庭でも話題にし、ムクロジの実をいただいたことがきっかけ

となりました。早速それが何であるのか、考える基となりました。次に子どもたちが遊びのなかで使っているものと同じであることを知った感動は大きなものでした。

ムクロジの実、その中から出てきた種を自分の手にしてみましたが、今度はムクロジの樹は、どんな樹なのか、どこに在るのか興味をもつようになり、植木屋さんに聞いた子どももいたようです。

また「どんぐりみたいな気がする」と言った子どももいましたので、どんぐりの実を羽子板で試してみました。しばらくつくと割れてしまいました。それをみて子どもたちはどんぐりの実ではふさわしくないと感じ、さらに私たちの先人たちがこの種を発見し、羽根つきの遊びに取り入れてきた力に「すごい！」と感激、遊びの文化を感じたにちがいありません。

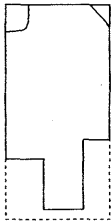
つくる

四歳時に『羽根つきの羽根の球はムクロジの種である』ということを発見した思いは、年長に進級し、三学期に再び羽根つきの遊びを始める頃もそのことをよく覚えていました。

私は、その思いを造形活動につないでいきたいと考えました。それは子どもたちが使っている羽子板は、軽くて持ちやすいのですが、板面が狭いため（柄の長さも含めて三十一・七センチメートル、最も幅があるところは十センチメートル、柄に近い部分は七センチメートル）続けてつくことが困難です。そこで、もう少し板面の広さがあり、自分の手に合う羽子板をつくることにより、羽根つきの遊びがもっと楽しくなるように羽子板づくりに取り組むことにしました。

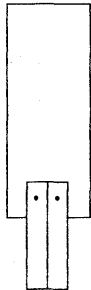
そのために、子どもたちがいつでも取り組める

作例1



段ボールを使用幅16cmある段ボールの切れ端を見つけてフェルトペンで柄の部分を鍵型に描きはさみで切り取る。

作例2



板材をそのまま使う。柄の部分は長さ15cm。幅と奥行き2cmの木片を22mmの釘で打ちつけている。

作例3



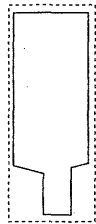
鋸で切り取る線を描いて柄の部分を残して鋸で切っている。

作例4



鋸で切り取る線を描き、柄の部分を残して鋸で切る。その後、上部左右に斜めの線を描き鋸で切り取る。

作例5



板材の上に羽子板の形を描き、鋸で切り取る。

ように環境づくりをしました。常設の大工コーナーに材料と道具を配置しました。材料については、建具屋などから集めた様々な形や材質の木片に加えて、材木店で製材していただいた幅九センチメートル、長さ四十七センチメートル、厚さ一センチメートル板材（アガチス）を準備しました。

羽子板の木材選択については、第一に硬い方が羽根をついた時に、高くていい音がするのでないかと思いましたが、幼児が鋸で切りやすい硬さのもの、しかも縦でも横でも斜めでも切ることが可能なものを考えました。第二に薄い方が軽くて切りやすいと思いましたが、反りが生じない厚さも確保する必要がありました。

子どもたちがつくった羽子板は、前頁の下図のとおりで主な作品を列挙します。

羽子板づくりのなかで、段ボールでつくった羽子板は、幅十六センチメートル、柄までの長さ三

十一センチメートルでした。子どもにとっては自然につくり出した好ましい大きさかも知れませんが、また、段ボールでつくる発想に感心しました。

特に作例5は板材に羽子板の形を描いて一生懸命鋸で切ったのです。「鋸で切るとは大変なのだから、一日では終わらない」と友達に話していました。子どもにとって大きな仕事をした誇らしい思いであつたのでしょう。

子どもたちはムクロジにこだわり、自分の羽子板までつくってしまいました。私は、羽子板にする板材について様々な考え、こだわりをもって選びました。この活動のきっかけとなったムクロジとの出会い、ムクロジにこだわったのは、私自身であるかも知れません。

ムクロジとの出会いに感謝します。

（福岡教育大学附属幼稚園）